

再発・転移を防ぐ 癌がわかる 腫瘍マーカーの教科書

医師・看護師・鍼灸師など腫瘍マーカーの見分けがわかると治療が理論的にになります

医学博士・医師 小林 常雄 著

特異マーカー、関連マーカー、増殖マーカーから出る情報の3つの組み合わせで再発・転移などのリスクがわかる!

単独の特異的腫瘍マーカー → 複合マーカーで診断
フェリチン(FT)を血清鉄で割ったものは腫瘍の拡大との相関が高い

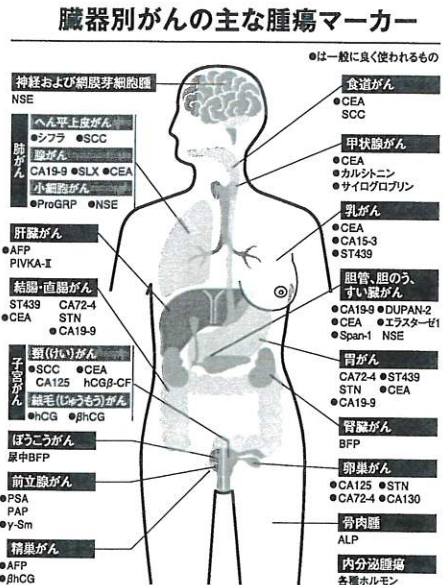
フェリチン(FT) → 高くなる……腫瘍の拡大を予測
血清鉄(Fe) → 低くなる……腫瘍の縮小を予測

※がんの増殖状況では血清鉄(Fe)に対して、フェリチン(FT)は増加することが多い。
※FT/Feの診断法は、米スローンケタリングがんセンターの論文をベースに著者が考案。

医師・治療家のための専門書

早期発見・早期治療をしても、がんによる死亡者数は減少していません。

四六判・128頁
定価2,420円(税込)

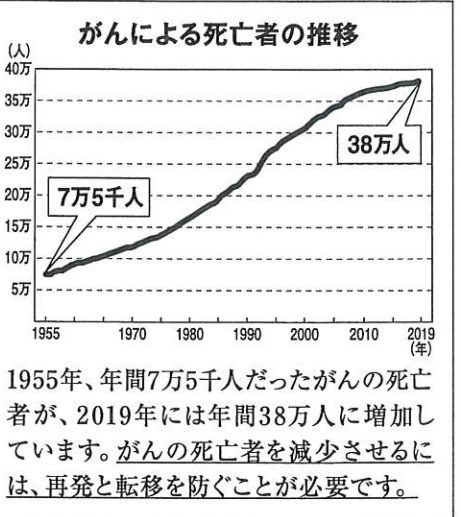


がんの検診や治療に膨大なエネルギーを費やしながら、日本でがんによる死亡者数がいっこうに減らないのはなぜか?

乳がんの死亡者は、子育て世代が多く、検診で早期発見しても、再発をする場合が多い。再発と転移を防ぐことが大切。公的保険の制度改正も今後の課題です。

鍼灸師やコメディカルスタッフが、腫瘍マーカーの知識を身に付けると治療が科学的になります。これからは、「治療の診える化」も必要です。

臨床検査技師 橋口 修



Amazon 第1位 (東洋医学5/17~18) 化学療法、手術、放射線に+第4の治療法を探る

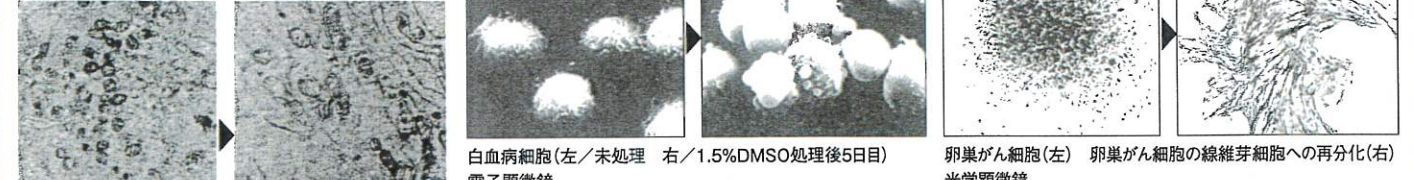
癌・温熱療法の科学

改訂版 1,000人以上の医師・研究者が読んでいます。

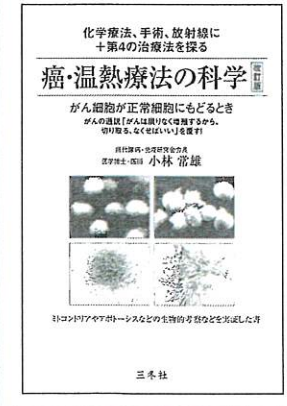
～がん細胞が正常細胞にもどるとき～ 医学博士・医師 小林 常雄 著

がんの通説「がんは限りなく増殖するから、切り取る、なくせばいい」を覆す!
「正常細胞はなぜがん化するのか」「がん細胞が正常細胞にもどるときは条件は何か?」
がんは熱に弱い、ミトコンドリアとがん、正常細胞が熱エネルギー不足になった時など、生物学的考察・科学的理論と臨床を結び付けた話題の本を改訂復刻! ……今ではミトコンドリアががんなどの病気にかかわることが通説になっています。

正常細胞は主に酸素で、がん細胞は解糖で代謝します。

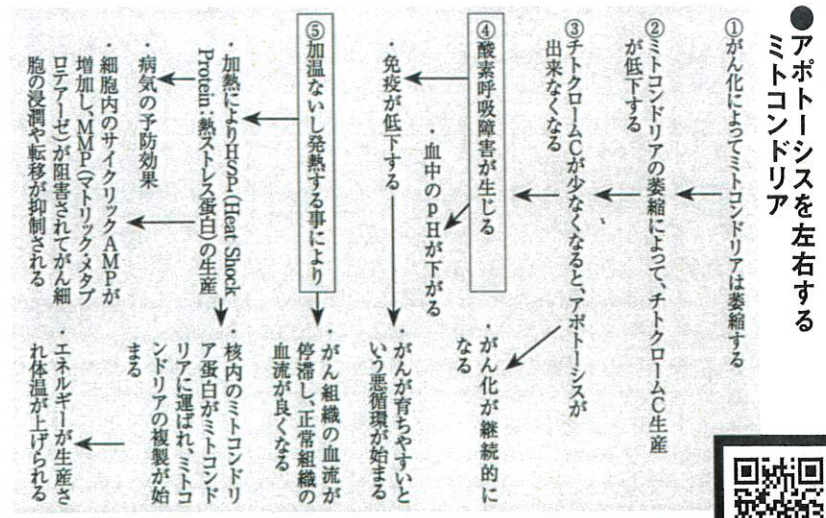


萎縮したミトコンドリア
ミトコンドリアが復活してプロローラようになる



「第4の治療方法を探る」
約150年もの間、がん治療の考え方は変わらなかった。今、がんを科学的に考えるべきです。局所温熱療法は保険適用にもなっています。新しい治療概念の扉が開かれることを期待します。

四六判・136頁
定価1,320円(税込)



再発・転移を防ぐ

癌がわかる

医師・看護師・鍼灸師など腫瘍マーカーの見分けがわかると治療が理論的にになります

腫瘍マーカーの教科書

医学博士・医師
小林 常雄 著

特異マーカー、関連マーカー、増殖マーカーから出る情報の3つの組み合わせで再発・転移などのリスクがわかる!

単独の特異的腫瘍マーカー → 複合マーカーで診断

フェリチンを血清鉄で割ったものは腫瘍の拡大との相関が高い

フェリチン(FT) → 高くなる……腫瘍の拡大を予測

血清鉄(Fe) → 低くなる……腫瘍の縮小を予測

※がんの増殖状況では血清鉄(Fe)に対して、フェリチン(FT)は増加することが多い。
※FT/Feの診断法は、米スローンケタリングがんセンターの論文をベースに著者が考案。

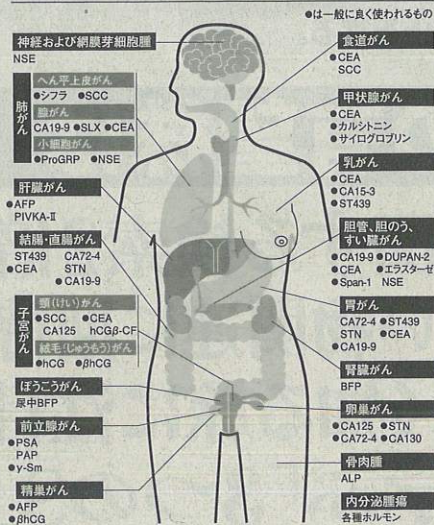
医師・治療家のための専門書

早期発見・早期治療をしても、がんによる死亡者数は減少していません。

四六判・128頁
定価2,420円(税込)



臓器別がんの主な腫瘍マーカー



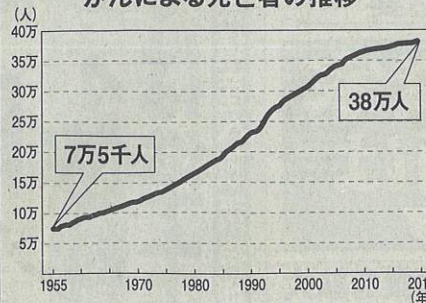
がんの検診や治療に膨大なエネルギーを費やしながら、日本でがんによる死亡者数がいっこうに減らないのはなぜか?

乳がんの死亡者は、子育て世代が多く、検診で早期発見しても、再発をする場合が多い。再発と転移を防ぐことが大切。公的保険の制度改正も今後の課題です。

鍼灸師やコメディカルスタッフが、腫瘍マーカーの知識を身に付けると治療が科学的になります。これからは、「治療の診える化」も必要です。

臨床検査技師 橋口 修

がんによる死亡者の推移



1955年、年間7万5千人だったがんの死亡者が、2019年には年間38万人に増加しています。がんの死亡者を減少させるには、再発と転移を防ぐことが必要です。

Amazon 第1位 (東洋医学 5/17~18) 化学療法、手術、放射線に+ 第4の治療法を探る

癌・温熱療法の科学

改訂版

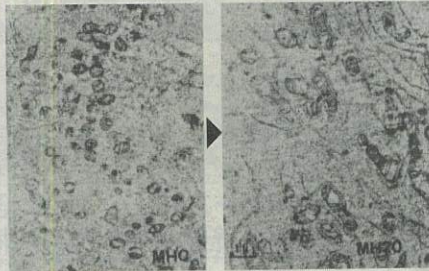
1,000人以上の
医師・研究者が
読んでいます。

～がん細胞が正常細胞にもどるとき～ 医学博士・医師 小林 常雄 著

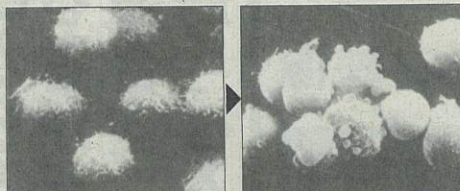
がんの通説「がんは限りなく増殖するから、切り取る、なくせばいい」を覆す!

「正常細胞はなぜがん化するのか」「がん細胞は正常細胞にもどるのか」「がん細胞が正常細胞にもどるとき条件は何か?」
がんは熱に弱い、ミトコンドリアとがん、正常細胞が熱エネルギー不足になった時など、生物学的考察・科学的理論と臨床を結び付けた
話題の本を改訂復刻! ……今ではミトコンドリアががんなどの病気にかかわることが通説になっています。

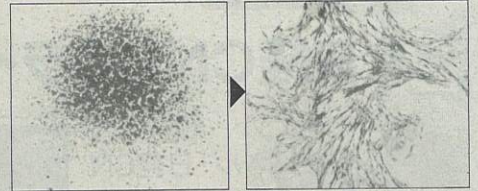
正常細胞は主に酸素で、がん細胞は解糖で代謝します。



萎縮したミトコンドリア
ミトコンドリアが復活して
フローラのようななる



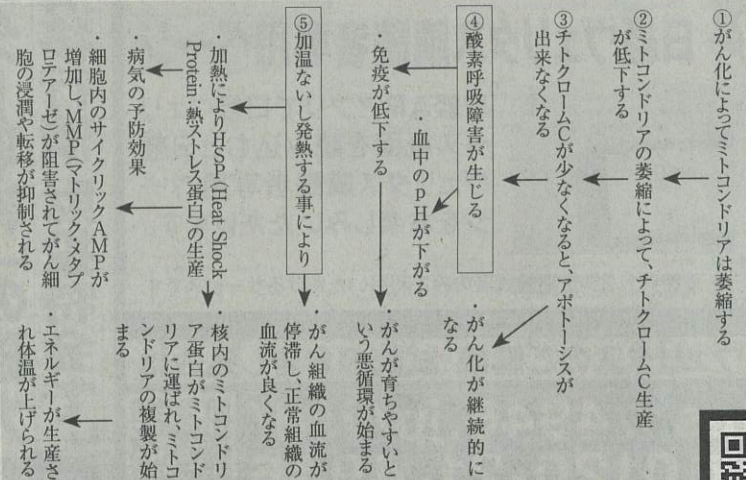
白血病細胞(左/未処理 右/1.5%DMSO処理後5日目)
電子顕微鏡



卵巣がん細胞(左) 卵巣がん細胞の線維芽細胞への再分化(右)
光学顕微鏡

※画像はシャーレの中で確認されたもので、人体で確認されたものではありません。人体でも同様の事が起こると推測すべきです。

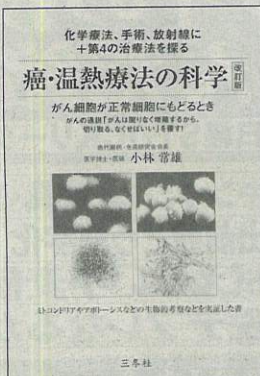
● アポトーシスを左右する
ミトコンドリア



「第4の治療方法を探る」

約150年もの間、がん治療の考え方は変わらなかった。今、がんを科学的に考えるべきです。局所温熱療法は保険適用にもなっています。新しい治療概念の扉が開かれることを期待します。

四六判・136頁
定価1,320円(税込)



州2-11-2 Tel.03-3231-7739 Fax.03-3231-7735

<https://www.sanθο.net>
三冬社の「三冬」とは三年努力をすれば、実がなるという意味です。

※全国の書店でお求め下さい。お近くに書店がない場合のご注文はamazon等ネット書店でもお求めできます。



日本経済新聞 2022年6月12日

遺伝子に傷 進化の宿命か

がんの本性

がんは不治の病ではなく、治療手段が格段に進歩したためだ。ところが今も、日本人では死因のトップとなる全体の約3割を占め、ドイツや米国でも多くの人の命を奪う。医学が発展しても、なお制圧できないのはなぜか。人類はまだ、がんのすべてを理解したわけではないから。がんの謎めいた姿に迫られたとき、この病を乗り越えるヒントが見えてくる。

怖さは変わらない。正常な細胞が急に増殖を始め、体の動きを妨げる。老化などで遺伝子に入る傷の蓄積が、がんの二因になるといふのが定説だ。

だが理化学研究所のチームは、傷が招く異常な細胞の出現を抑える仕組みが働かない事態こそが元凶との見方を示す。

ショウジョウバエの実験では、細胞を増やすP38遺伝子が働くと、がん細胞を殺すJNK遺伝子も同時に動いた。細胞が急に分裂を始めたら、誤ってがん細胞

も生まれかねない。「防波堤として、生物はJNK遺伝子を使う」（同チーム）

しかし体中にある様々な防波堤をいかくくってしまつたとき、がん細胞が顔をのぞかせる。問題は、がんが「できること」ではなく、「出現を防げないこと」だとユ・サガン・チームリーダーはいう。

2020年にがんのできた人は日本でも約38万人いる。日本のがんの統計によると、死亡率は約14.8人あたりで男性は約1.48人、女性は約0.83人だ。

外縁や化学物質、放射線にさらされてもDNAは傷む。数年から数十年を経て、がん細胞が現れる。DNAは約60億個の部品からなる。体が備える安全装置によって、傷が1、

数個であれば6時間後には約8割が元に戻る。だが最大で7個の傷がつくとすると、18時間後も6割が残る。量子科学技術研究開発機構の中野敏彰主幹研究員らが、放射線を浴びせた100万個に及び、ヒトのリンパ球を調べて突き止めた。

東京医科歯科大学の清水幹彦助教らは、細胞が持つ約2万個の遺伝子のうち、「RAS」と呼ぶ遺伝子を含む3個が変化するだけで多くのがんを生み出す親玉ができる現象を見つけた。登場した近年のことだ。

東大の中川恵一特任教授は「江戸時代には、日本人に多かった胃がんも止まらずに診断できなかったはずだ」と話す。診断や治療ができるようになったのはレントゲンや内視鏡、麻酔が登場した近年のことだ。

だが希望の光がとれる。熊本大学の三浦恭子准教授らが研究するのはアフリカに暮らすハダカデバネズミだ。寿命はマウスの10倍の約30年と長い。がんになりにくい。発がん物質にさらしても、がんがでなかつた。長寿が必ずしも悪いわけではないようだ。

iPS細胞を作って調べると、がんを防ぐARF遺伝子が働くと、増殖に関わる一部の遺伝子が壊れていた。ARF遺伝子の働きが鈍れば細胞の増殖を抑え、がんの発生を防ぐモードに移った。「仕組みが詳しく分かれれば、人間の遺伝子の動きを調節してがんを防ぐ薬を作れるかもしれない」（同准教授）

細胞分裂で遺伝子が傷つきやすいのであれば、体の大きな動物はがんになる確率が高いはずだ。ところが「クジラの細胞の数をヒトの1千倍と考え

ると80歳までに大腸がんになる確率は10.0%だ。しかし、実際には1.0%だ。これは2%以下の報告がある」（東京都健康長寿医療センター研究所の志智優樹研究員）。がんの出現を抑える術（すべ）がこの世界どこかにある。

人類も手をこまぬいてい

るわけではない。人口構成を考慮した死亡率は、日本人の男性では1990年代後半から下がり続けている。がんの原因になるピロリ菌や肝炎ウイルスの感染者が減り、喫煙率が下がったためだ。

それでも多くの人々は、がんを患う。国立がん研究センターは、予防が大切だと説く。禁煙と節酒、バランスの取れた食事と運動、適正体重の維持でリスクは4割減るといふ。検診も大事になる。

（草塩拓郎）

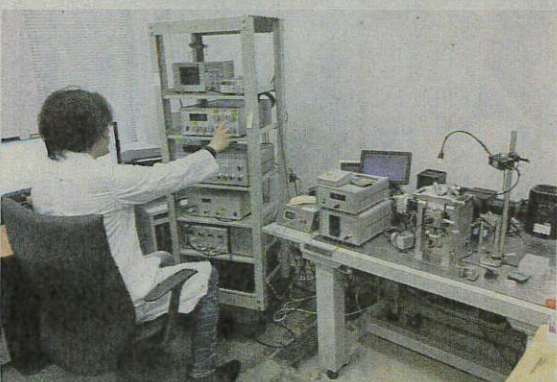
がん無縁のネズミ、克服の糸口

がんの3つの謎

1 なぜ生まれる 遺伝子の傷が治らないからか

2 なぜ増える 退治する仕組みが弱まるのか

3 なぜ転移する 手引きする黒幕がいるのか



量子科学技術研究開発機構はがんにつながるDNAの傷を高性能な顕微鏡で観察した—同機構提供



体にがんを防ぐ仕組みを備えたハダカデバネズミ—熊本大学提供